
着眼

奈義沙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

着眼

【Zコード】

N8120C

【作者名】

奈義沙

【あらすじ】

整形外科医師である柳生隆は、仕事ばかりの生活に疲れていた。端々と過ぎていく毎日。理想とかけ離れた仕事。やらされ感覚で日々の診療をこなしていた。そんな中、ふとしたことから病院で起こっている不可思議な出来事に気づく。病院という、閉鎖的な世界でいつたい何が起こっているのか。少しづつ、柳生本人にも忍び寄るもののが・・・。

「3時間も立ちっぱなしは應えるな。」

思つた以上に出血がひどく、足の手術とはいえ、いつもより長引いてしまつた。

「こんなこともありますよ。心臓疾患がなければもつとスムーズに済んでいたんですがね。」

助手をしていた佐藤一平が疲れていた私を気遣つてくれた。彼は俺と同じ整形外科の医師だ。同じ歳ではあるが、彼の方が1年ベテランだ。彼とはライバルだが、同時にお互いの腕を認め合える良い間柄だと思っている。

「輸血用の血液を十分用意しておいて良かつたよ。」

「あの患者、結構なお年だつたからな。沢山用意しすぎたと思ったが、慎重に越したことはなかつたな。」

「おいおい、いくら本人がいないからつて患者呼ばわりはまずい。院長に目をつけられるぞ。」

「大丈夫。院長はとつくにこ帰宅を。」

「なんだつて？まだ夕方の6時じやないか。」

「いつものことじやないか。このところ眼科は暇なのぞ。」

「とつとと帰るなんて、院長にはむつと管理者としての直覚を持つてほしいよな。」

最近の医療制度改革の影響を大きく受け、俺が勤める長野南部病院も急激に患者数が減つてきた。さらに医師不足も深刻な問題となつており、整形外科の医師は俺と佐藤、整形外科管理医師の須藤先生を含めても3名という劣悪な環境となつている。

いつの間にか、俺は愚痴つていた。

「こんなに毎日手術続きじや体がまいつりやつよ。」

「明日は俺が執刀しますよ。柳生先生。」

「お前はタフでいいよな。」

「柳生先生も、なにかスポーツをした方がいい。食べて動くことが健康への第1歩さ。」

「そうはいっても、なんともその気がしないんだ。今日手術した患者さんにだつて、もう歩けないかも知れないと、なんて告知するような仕事ばかりしているんだ。元気が出ないんだ。」

「・・・」

毎日が端々と過ぎていく。仕事に、患者に、追われるような感覚。ずっとこんな生活が続くのかと思うと、気が滅入つてくる。医師という仕事は、人間を扱っているにも関わらず病気ばかりが目につき、相手の人間性や感情まで正直相手にしていられないことが多い。こんなはずではなかつた。俺が初めて医者を目指したとき想像していたのは、明るい現場、患者さんとの楽しい会話だつた。こんなにも現実とは皮肉なもののか・・・。人間を活かす仕事がしたかつたはずなのに、人間に現実を突きつける仕事ばかりしている気がする。いや、させられている気がする。

不意に、こんな独り言が出てきた。

「自分を、生活を、変えたい・・・」

雪がちらちらと舞つており、冬の景色をさらに寒く感じさせる。冬の運転は気が抜けないので、あまり好きではない。田舎は自動車通勤が当たり前であり、家から10分ほど走ると病院がある。歩くにも遠いので今日も車で出勤してきた。途中、道の脇に突っ込んだ車が立ち往生していた。少しのミスで人生が変わるという点では、車の運転と医師の手術には似たものがあると思う。違うのは相手が居るか居ないか、もしくは起きているか寝ているか、更に言えば、相手が私のことを知らないのか知っているのか。そんなことを考えていたせいか、気が付くと俺はつぶやいていた。

「はー・・・。今日もなんとなくやる気が出ない・・・。」

今日は朝から外来担当だ。暖房の効きが良くないのだろう、廊下の空気が肌寒い。診察室前の待合室、というよりは巨大待合廊下というべきか、並んだ長椅子には患者が満員となつており、座りきれない患者達は既に診察室を立ち見状態で見つめている。本当に病院全体の患者数は減つてしまっているのかどうつか。

「今日も三時間待ちかねえ・・・。」

「待つていると余計病気になっちゃいそう。」

患者の愚痴が耳に入ってきたが、なにくわぬ顔で診察室へ向かう。ふと見ると、眼科の前だけは、まるでそこだけ虫に食われたように、数人の患者が待つてているだけであつた。

「これじゃよっぽど暇だよな。なぜ院長を下されないんだ？」

素朴な疑問が頭をよぎつたが、診察室に着くや否やカルテと患者の津波に襲われ、疑問は跡形もなく消え去ってしまった。

「今日も大変だったな」

医局でコーヒーを飲もうしていた俺に、同僚の佐藤が声を掛けて

きた。先に来ていたらしい。診察が一段落した午後3時過ぎ、医局には多くの医師が休息のために詰め掛けていた。その中には院長、副院長一人の姿もある。

「まあいつものことだ。患者さんの話もろくに聞けないな。」

院長の視線が気になり、「患者」ではなく「患者さん」と呼ぶことにする。佐藤も俺に同調する。

「患者さんのためにも、軽く流すよつた短時間診療はしたくないんだがな。」

「佐藤、お前も忙しそうだつたな。お互い体は大事にしよう。」

「もちろん。毎日有名な黒人のD.V.Dを見て運動しているから安心してくれよ。そつちも毎日車じやなくて、たまには歩いたらどうだ？」

「こんな寒い中歩くなんて、どうかしてると思われるぞ」

「そんなことない。最近この辺では外を歩く健康法が流行っている。今日来た患者さんも話していた。」

「こんな寒い中を毎日歩いたら、むしろ不健康になりそうだよ。」

「何でもいいからやってみればいい。ものは試しと言うだらう?」

「他人事だからだろう、佐藤には好き放題言われてしまつた。確かに最近少し腹が出てきたような気もする。少し考えたほうがいいのかも知れない。佐藤はまだ仕事があるので、それだけ話すと医局を出て行つた。

ふと窓の外を見ると、午前中から降る雪がまるでやむことを知らないかのように、ゆっくりちらちらと舞い降りてきている。結構積もつていると思う。今日の帰りも車の運転が心配だ。

そういえば、さつき佐藤が言つていた。外を歩く健康法が流行っている。本当だつた。早朝に時々緊急呼び出しを食うが、未明から寒い中を歩く人を見かけることがたびたびあつた。時には深夜の場合もあり、危うく車で引きそつになつたこともある。寒くなり始めた頃から、徐々にその数を増やしているように思う。歩いているのは中年ばかりでなく、中には普通に歩くことが厳しいうな杖を

ついた老人もいた。

「風邪をもらいに行くようなものだと思うんだが・・・」
そんなことを考えてながら、医局に設置されている自分の机の上へ向かう。そこには見慣れない書類が置いてあった。

「長野南部病院 収支報告及び経営管理会議」と、書かれている。
何か月かに一度、そんな会議が開かれているようだつた。特に役職のない俺には関係ないことだと思っていた。何気なく何ページかめくつてみると、ふと、患者数と病院の収入の欄が目に留まった。俺は驚いた。

「これは、どうしたことだ？」

俺はその会議資料を食い入るように見つめた。今年度に入つてから患者数が大幅に減少しているにも関わらず、病院収入は去年の一割増しになっていた。患者1人当たりにかかる医療費が何割増しにもなっている計算だ。保険点数の大幅な改正もなかつた。高度な手術を取り入れた訳でもない。今まで通り診療していたにも関わらず、だ。実際、俺が所属する整形外科は減収になつていた。更に見てみると、眼科の収入が異常な伸びを示していた。その詳細を確認すると、

「保険外診療？」

医療保険が適応にならない保険外診療が、眼科の収入源の半を占めていたのだ。今まででは考えられない現象だ。特に、眼科は患者数の減りが激しく、唯一の眼科医師である院長も定時で帰ることがほとんどであるはずだ。いつ、こんなにも大きな収入を得られるような診療を行つているのか、俺には検討もつかなかつた。そこで、たまたまそばにいた整形外科管理医師の須藤先生に声をかけた。

「先生、この眼科の収入は何があつたんですか？」

須藤先生は俺の上司にあたるので、気を使いながら聞いてみた。

「え？」

不意を突かれたかのような声で返事が返つてきた。更に聞いてみた。

「いや、眼科が多額の保険外診療のおかげで増収になつていたのが気になつたので・・・」

「え・・・いや、私は良く分からぬよ。そんなことよりきみ、我が整形外科の収入は減収続きじゃないか。何か良い手でも考えたまえ。」

そう言つと、須藤先生は医局を足早に出て行つてしまつた。

「なんだかはぐらかされたような・・・。」

普段の須藤先生ははつきりした性格であり、今回のような中途半端な態度はあまり見たことがなかった。なんとなくかみ合わない空気を、俺は感じざるを得なかつた。

何か説明するのに不都合なことでもあったのだろうか。須藤先生の態度に疑問を抱きながらも、俺は帰途についていた。十一時を過ぎ、空は星空になつていて、きれいな満月が未明から五十センチも降り積もつた雪を照らして、全体が天然の照明となつていた。対照的に、最近導入された最新式の雪かき車のおかげもあり、道路には真つ黒なアスファルトが覗いていた。しかしながら、よく見るとライトに照らされたアスファルトは独特的の光沢を帶びており、一目で凍り付いていることが分かつた。やはり運転は気を抜くことが出来なかつた。

ほんの十分程しか運転していなかつたが、三十分くらい運転していたような感覚だつた。やつとの思いで自宅に到着した。

「お帰りなさい。」

篠崎洋子が、エプロン姿に片手になべぶたという格好で明るく迎えてくれた。洋子は同じ病院の整形病棟に勤務する看護師で、俺より二つ年下だ。一ヶ月位前、急に色っぽくなつたと思つたら、何の前触れもなく向こうから言い寄つてきた。もともと顔がタイプではあつたが、あまりに急な変化になんとなく疑問があつたので、はつきりした返事はしていなかつた。しかし、洋子は半ば一方的に、と言つてもこちらにとつても迷惑というわけでもないのだが、週二日位のペースで家に来るようになつていた。

「今日も遅かつたのね。」

なべの中でぐつぐつ煮込まれたシチューの様子を見ながらも、俺を気遣つてくれているのが伝わつてくる。

「こつものことだよ。遅くなつてごめんよ。」

「ううん、平氣よ。お疲れ様。ご飯すぐ出来るから。」

洋子の暖かさのあるやさしさは、つまらない仕事中心の日常に花を添えてくれていた。そんな彼女に癒されているのだろう、数回家に

来ただけだったがこの家の鍵を渡すことにしたのだった。

「おまたせ。」

洋子は夕飯の準備を終え、二人がけのダイニングテーブルの対面に座つた。着替え終わった俺は、あたたかい夕飯を目の前にしつつ椅子に座る。

「いつもありがとう。」

俺は、最大限の感謝をなんとか言葉で示してみた。

「ううん。私も一緒にご飯が食べられて幸せよ。」

女性のことは正直苦手で、言葉足らずに輪をかけたような声掛けしかできないような俺だったが、洋子の懐はとても広く、そんな俺をよく理解してくれていた。そして、素直だった。そろそろ正式に付き合つことを考えたほうがいいのかもしれない。

「じゃ、食べようか。」

二人で手をあわせて「いただきます」をする。暖かいシチューは、慌しい仕事場や寒々しい帰り道のことを忘れさせてくれた。そんな心地よい時間を堪能していると洋子は、

「そうそう、知ってる?」

と、切り出した。

「何を?」

「院長が最新医療を導入するための試験をしてくるって話よ。」

「院長が?」

俺は、洋子の一言で現実の世界に引き戻されてしまった。

「院長は、毎日定時で帰るような生活しているじゃないか。いつそんな時間があるんだ?」

「うーん。何でも、まだ保険外診療になるからあまり公には出来ないそななんだけど、世界的にも注目されている治療法らしいのよ。そんな話は初耳だった。

「具体的には何か知ってるかい?」

「いえ。目の手術ということ以外は何も・・・でも、ホントに凄い治療っていう話だから・・・」

「へえ・・・」

不意に俺の携帯が鳴った。嫌な予感がした。

「・・・はい。わかりました。」

予感は的中した。

「病院？」

「ごめん、急患だ。せっかく帰ってきたのに、病院に逆戻りになっちゃったよ。今日はここに泊まっていきなよ。終わったらすぐ戻る。」

患者さんには申し訳ないが、彼女との暖かい時間をもう少し長く味わっていたかった。俺はさつと着替えて、まだ暖かさの残る車で病院に舞い戻った。

病院の中は、外に積もった雪のせいもあるだらう、思いのほか静かだつた。俺は、急いで廊下を抜けて救急外来に向かつた。途中、誰もいない待合室で、大きめのプラズマテレビがついたままになつていた。病院の紹介画像が永遠と流れる、いわば病院の宣伝専用テレビだ。昼間はずつと同じ画像が流れていることは知つていたが、真夜中でもついていふとは思わなかつた。

急患は、足を骨折した70過ぎの男性で、昨日俺の外来で肩の診察を受けたばかりの患者だつた。昨日は杖をついて歩いて来ていたのに、一日や一日で歩けない状態になつてしまつた。怪我とは怖いものだ。

一応の処置は既に終わつており、今後の方針を決めるために俺は呼ばれたらしい。レントゲンを確認する。どうやら緊急性はないようだ。

「長居さん、足の痛みはビリですか？」

俺は、急に呼ばれた不機嫌さを悟られないよう、なるべくやさしく問いかげた。

「ええ、痛み止めが効いているようで随分楽になりました。」

長居さんは、穏やかな声で言つた。もともと落ち着きがある人のようだ。

「どこで怪我をされたんですか？」

「お恥ずかしい話ですが、外を歩いていたら足を滑らせまして・・・」

「え? こんな時間にですか?」

俺は耳を疑つた。もう夜の一時になろうとしているにも関わらず、外を歩いたらしい。気温が氷点下にもなる中を、だ。更に聞いてみた。

「どうしてこんな時間に外を?」

「いやあ・・・なんとなく外を歩けば健康になれる気がしたんですね。今まで外を歩くことなどあまり好まなかつたのですが、昨日あたりから急にそう思いましてね。」

こんな極寒の中であつても、外を歩くことで健康になれる気がしたといつ。テレビやインターネットでもそんなことは流行つていなし、もちろん俺の診療でも外を夜中に歩くよりには言つていないと特に運動習慣がなかつた爺さんだが、どうしてそんなことを思いついてしまつたのだろうか。

本人との話し合いの後、近日中に手術することになつた。それにしても、外を歩くことは確かに体には良いことだと思うが、冬の夜中にそんなことをすれば、むしろ毒になりそうなことくらいは分かること思うのだが・・・俺は、ずっとついたままでいる待合室のテレビを横切りながら、そんなことを考えていた。テレビは、病院の紹介ビデオを単調に流し続けていた。

家に帰ると、もう深夜の一時を過ぎていた。家の電気はどいつもおらず、暗く静かだった。洋子は帰ってしまったのだろうか。電気をつけると、ダイニングテーブルの上の冷え切ったシチューが俺を待っていた。さつき食べかけたままでラップがかけてあった。温かかったシチューの変貌ぶりに、なんともいえない寂しさがこみ上げてきた。

電子レンジへシチューを入れて温める。ボタンを押すと、レンジの無機質な音が部屋の中に響いた。中で回るシチューを見ながら、俺は考えていた。

どうして保険外診療の眼科手術が突然増えたのだろう。なぜ、整形外科管理医師の須藤先生は、そのことをはぐらかすような態度をとったのだろう。なぜ、外を散歩する人間が急増しているのだろう。なぜ、危険な夜に長居さんは歩いていたのだろう。

俺は、最近になって奇妙な事が多く起こっていることに、なんとなく胸騒ぎを覚えていた。何か起きそうな気がするのだ。

いつの間にか、シチューが数時間前の温かい姿へとよみがえっていた。ひとり寂しくテーブルへ運び、席に座る。一口食べてみると、先程と同じように美味しかった。しかし、目の前に洋子がいるのか、いないのかで味は変わるものなのだろうか。なんとなくもの寂しく、粉っぽいようにも感じた。それでもそれを紛らわすかのように一気にかき込んだ。

「やっぱりちゃんと食べてくれたね。先生、優しいから。」

突然、背後に暗がりから声が聞こえた。一瞬で洋子の声だと分かった。

「洋子、びっくりするじゃないか。」

俺の後ろからゆっくりと現れた洋子は、横を通り過ぎると対面の

椅子に座った。食べるかどうか見ていたのだろうか。俺の目を無表情に見つめながら、小さな声でつぶやいた。

「『ごめんね。』

何の話だらう。まったく想像のつかない言葉が洋子の口から出てきた。

「いきなり出てきて少しひっくりはしたけど、別に怒ってなんかいないよ。一体何の話だい？」

俺の言葉を聞いて少しばかり安心するかと思つたが、それ所が深刻な顔は全く変化がない。更に、彼女の顔が遠くに見える気がしてきた。視界が狭くなつてくる。

「ごめんね。薬入れちゃつた。」

「え？…何の…薬だい？」

言葉も出にくくなつていた。

「あなたなら、分かるんじゃないかな？柳生せ・ん・せ・い。」

自分で望んだわけでもない睡魔を、俺は受け入れざるを得なかつた。何が起こつたか理解できない今まで。

頭がガンガンするつえに、まぶたがとても重い。そして肌寒い、まぶしい、口が渴く。色々な感覚がある。俺はどうしたんだ。どうやら仰向けで寝ているようだ。それにしてもこのベッドは堅く、体の所々が痛く感じた。

ゆっくりと目を開けてみる。そこは見慣れた空間があった。いつも同僚の佐藤としている手術室だった。俺は、目の前から手術用の強い照明を当てられていた。俺は、生まれて初めて手術用ベッドに寝かされていたのだ。

俺は確か洋子のシチューを食べていたはずだ。そのあと洋子が現れた。そして・・・思い出せない。どうやってここまで来たんだ。とにかく、寝ていても仕方がない。俺は体を起こそうと腹筋に力を入れた。

「ガチッ」

鈍い金属音と体中の痛みが伝わってきた。俺は体を起こすことが出来なかつた。頭を持ち上げて今の状況を確認する。首も、腕も、胴体も、足も、普段は動くであろう関節がことごとく鎖で縛りあげられていた。何度ももがいてみたが、虚しく金属音が響くのみでびくともしない。いつたい何が起こつたんだ。一生懸命、頭の中を整理しようと試みるが、まるでわけが分からなかつた。

さらに周りを見回してみる。いつも手術しているので、大体の道具や機材は知つてゐる。所が、普段は見慣れない俺の背丈ほどある機械が俺の右側に置いてあつた。左側には何もないが、部屋の隅には外科の手術で使うであろうメスや消毒液があつた。

「気がついたかね。」

視界の外から聞き覚えのある威厳に満ちた声が聞こえてきた。

それはこの病院の眼科医、すなわち長野南部病院の院長だった。

「すまないね。こんなことになってしまい・・・」

院長はそんなことをいいつつ、俺の顔を覗き込んだ。

「一体、どういうことですか！」

俺は声を荒げて言い放った。そんなことはお構いなしと言わんばかりに、院長は・・・いや、もう院長はやめよう。田中は俺の周りをゆっくり旋回している。

「強気でいるのは結構だが、自分の立場がまだ分かっていないようだね。」

そう言いながら、俺の脚元のほうへ歩き出すると、すぐまた右側に戻ってきた。

「洋子・・・」

そこには後ろ手に縛られた洋子の姿があった。口には何か縛り付けてあり、かすかな声をあげるのが精いっぱいのようだ。

「これで分かつたかな、柳生先生。」

田中は勝ち誇った表情を浮かべ、洋子を連れて俺の右側にある機械の方へ歩いてきた。俺は手足の自由を取り戻そうと何度も手足をばたつかせたが、俺を縛り付けている鎖は一向にゆるむ気配がなかった。

「ど、どうするつもりだ。」

「どうもしない。ただ、目にちゅうとした手術をさせてもらひただけだ。ちよつとした・・・ね。」

そう言つと、機械の電源を入れた。「ブンッ」と音がしたと思うと、低いモーター音が徐々に響き出してきた。

「怖がることはない。今まで1例の失敗もない。そして麻酔すらいらない、極めて簡単な手術だ。ものの数秒で終わる。」

俺の知識の中には、一般的な眼科の手術でこんなに大きな機械を

必要とする手術は存在しない。しかも、使い慣れた手術室であるはずにもかかわらず、今まで一度も見たことがないといふことも不自然だ。

「洋子、大丈夫なのか？」

俺は、田中の隣に立っている洋子に声をかけた。しかし、洋子の視線は俺どころか宙を見上げていた。まるで上の空だ。返事もしない。不自然な点ばかりだ。

そして、田中は自慢げに話し始めた。

「君はもちろん知ってると思うが、マインドコントロールは分か
るかね？」

機械のキーボードになにやら打ち込むと、田中は薄笑いを浮かべ
ながら俺の顔を再び覗き込んだ。

「聞いたことはあるが、実際にやつてみるなんて聞いたことは無い。

「君は、マインドコントロールはITの中の話だと思つてはあるま
いね。」

「・・・どういふことだ。」

「現実にこの病院でも行われているのだよ。」

俺は耳を疑つた。いつたいどのような方法でそんなことなどが可能に
なるんだ？

「君も私の研究に貢献してもらつ立場になるわけだから、そのシス
テムを理解してもらわないとね。」

「研究？何だそれは。」

「医師というものは、医学の発展に貢献するのは当たり前の話だろ
う。最先端の医療の開発に貢献することになるのだよ。」

「・・・」

そんな話は、この病院に勤めて以来、噂すら聞いたことが無い。

「極秘に進めているような研究など、俺は貢献するつもりは無い。

「まあ聞きたまえ。」

「・・・」

体の自由を奪われている以上、黙つてているしかない。

「私は医師なつて間もない頃から、一般市民の愚かさといつものを
をひしひしと感じていた。病気がかなり悪くなるまで病院には来な
い、手術を勧めても拒否する、拳銃の果てに飛び降りて自分の命を

粗末にする。どうしてこんなにも愚かなのだ。そう考えたとき、万人の幸福というものを満たすためには、愚かな一般市民の思考や感情をコントロール」ことが一番の近道だと分かったのだ。」

「なんだと・・・」

「愚かな一般市民に代わり、私が正しい判断をしてやることにしたのだよ。」

田中は、私の周りをゆっくりと巡回し、やや目線を上にしながら続けた。

「そして、私は十数年の歳月をかけて、この蜘蛛型洗脳装置、スペイダーの開発に成功したのだ。」

そう言つと、機械の上に乗っていたほんの5ミリも無いほどの物体を私の前に持つてきた。「この小さな黒い塊がそうだ。この装置はね、人の目に上に乗せると蜘蛛の形になり、自分で動くことができるのだよ。蜘蛛型になったスペイダーは、眼球に沿つて移動して、まず眼球の裏側に到達する。そこから脳に進入し、人間の意志や性格をつかさどる前頭葉にまで移動する。スペイダーは、その脚から脳の電気信号を出力して、本人の意思そのものを支配することができるのだよ。」

「馬鹿な！本人の意思と無関係に行動させるといふのか！」

「信じられるのかね？」

「そんなことは技術的に出来るはずが無い！」

「ほつ・・・。」

田中はややこらつきながらスパイダーを機械の上に乗せると、なにやらリモコンのようなものを取り出した。

「百聞は一見にしかず。君の目で確かめてみるといい。」

田中は、慣れた手つきでリモコンのボタンを数個押した。

突然、洋子が奇妙な行動をとり始めた。音も立てずに田中のそばに近寄つていくと、縛られた両手を向けるように田中に背を向けて立つた。田中は何の躊躇も無く縛つてあった両手のロープを解いてやる。

「洋子、どうしたんだ？」

俺の声など聞こえないのか、洋子は無表情でつぶやく。

「田中先生、私はあなたのことを愛しています。」

「！…。どういうことなんだ？洋子がそんなことを言つなんて…。」

「ふふふ、どうかね？君にとつては衝撃的なのではないのかな？」

「く・・・」

俺は悔しくて仕方なかつた。

「洋子、お前どうしたんだ？？」

俺は縛られた体をばたつかせながら、必死に叫んだ。しかし、洋子は無表情で止まつたままでいる。

「まだ分からぬのかね？」

田中はゆつくりと、またリモコンを操作し始めた。すると、今度は洋子は自分の首を両手で締めつけ始めた。

「う・・・ぐ・・・。」

「洋子！なにしてるんだ！やめろ！…。」

洋子はその力を緩めようとせず、そのまま締め続ける。そしてその場に倒れてしまった。

「洋子！…」

「安心したまえ、失神しているにすぎん。さすがに殺はしない。確かに、洋子は息をしているようだ。」

「これがマインドコントロールだ。分かつたかね？」

「・・・。」

「んなことがあつていいのか？実際に洋子は信じられない行動を

して、失神してしまつた。マインドコントロールといつのは思想や思考をコントロールする程度かと考えていたが、田中が行つてはいるマインドコントロールは、人間をロボットの様に操作できるようにしてしまつようだ。

「まだ信じられないなら、見せられるものは沢山あるが。」

「こんなことに何の意味があるというんだ！」

俺は何も出来ない憤りからか、単純な悔しさからか、自然と涙があふれてきた。

「本人の意思に關係なく行動させることに何の意味があるというんだ。」

「言つたはずだ。これは、一般市民に正しい判断をさせる唯一の方法なんだよ。」

「洗脳された人が、判断している？その人にも性格や嗜好、これまで培つてきた人間觀があるはずだ。それを無視しておいて、それが正しいなんておかしいだろ！」

「なんとでも言いたまえ。いい加減、立場をわきまえたらどうかね。」

「

田中はおもむろに機械に近づき、スパイダーをセットした。

「君もこの看護師と同じように、私の判断で動く人形と化してもらうわけだ。スパイダーが眼球に着いたら、それでおしまいだ。」

俺は必死にもがいたが、鎖はむしろ締め付けが強くなる一方だつた。

「さあ、おとなしくしなさい。・・・スパイダー準備完了、目標は

柳生先生の眼球」

田中は機械のセットを終えるとこいつぶやいた。

「さあ・・・着眼・・・開始だ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8120c/>

着眼

2010年10月15日22時04分発行